はじめに

暁烏敏師の高弟西村見暁師の遺文を集めて刊行する口火を切ってくださったのは、遺文の原稿作成や編集全般を担われた東真行氏（真宗大谷派出版部）でした。まずは明達寺様、鹿児島香草会様から転載許可をいただき、中本昌年氏（富山大学名誉教授）から東氏が西村師の写真の提供を受け、また東経行氏（九州教区常行寺）、市野光生氏（東京教区道誠寺住職）に校正の協力をいただいて、本書は誕生しました。

大正四（一九一五）年十一月二十六日石川県羽咋市に生まれた渡部次吉青年（満十六歳・後の西村師）が明達寺の門を叩いたのは、昭和七（一九三二）年八月十五日でした。その折に持参された手紙には「先生。私は仏になりたい。雄々しい生活者としての永遠の生命が得たい」とあり、翌春に正式に入門が許されます。

昭和十六（一九四一）年十二月東京帝国大学印度哲学科を卒業、暁烏一門の筆頭格として聞思を重ね、法藏館から『清澤満之先生』、『清澤満之全集』（全八巻、暁烏敏・西村見暁共編）を刊行されます。前者は西谷啓治氏（京都大学名誉教授）が絶賛した不朽の名著であり、後者は西村師が西方寺近くに暮らしながら、諸史料も含めて編纂された労作であり、その教恩は尽くせません。

本書には昭和二十七（一九五二）年～三十二（一九五七）年、明達寺から刊行されていた『広大会』『香草』に掲載されていた四十歳前後の師の遺文と昭和五十（一九七五）年に鹿児島香草会から刊行された本願文の意訳が収められています。因みに暁烏師は、昭和二十九（一九五四）年八月二十七日西帰ですから、その前後の足跡でもあります。

その後の西村師の生涯の一端を記します。

昭和三十五（一九六〇）年暁烏師七回忌の年に『暁烏敏全集』の刊行